



決め手は、青森県産。



りんご生産情報第8号
(7月27日～8月6日)

令和5年7月26日発表
青森県「攻めの農林水産業」推進本部

果実肥大は順調、着果量が多い！
良品安定生産に向け、見直し摘果の徹底を！！
褐斑病やハダニ類に注意し、適正な防除を!!!

I 概要

7月21日現在の果実肥大は、各品種とも平年を上回っている。

園地によっては着果量の多い樹が見られる。仕上げ摘果を終えていない園地では、作業を急ぐ。仕上げ摘果を終えた園地でも、見直し摘果を徹底する。

「7月末」の薬剤散布は、黒石、弘前、三戸で7月31日～8月1日頃に実施する。散布むらが生じないように基準散布量を守り、降雨前の散布を徹底する。

褐斑病やハダニ類の発生が見られているので、発生動向を見極めながら適正な防除を行う。

枝腐らんは見つけ次第切り取り、胴腐らんは再発病斑を含め、適切に処置を行う。

報道機関用提供資料	
担当課	農林水産部りんご果樹課
担当者	生産振興グループ GM 小笠原 宜弘
電話番号	直通 017-734-9492 内線 5092
報道監	農林水産部 次長（農商工連携推進監）成田 澄人 内線 4966

II りんご生産情報

1 果実肥大、作業の進み、病害虫の動き

(1) 果実肥大

各品種とも平年を大きく上回っている。

○果実肥大

(7月21日現在、横径cm、平年比%)

地域	年	つがる	ジョナゴールド	ふじ
黒石 (りんご研究所)	本年	7.2	—	6.5
	平年	6.4	—	5.5
	前年	6.9	—	6.2
	平年比	113	—	118
青森市浪岡北中野 (東青地域県民局)	本年	6.9	—	5.8
	平年	6.3	—	5.3
	前年	7.1	—	6.0
	平年比	110	—	109
弘前市独狐 (中南地域県民局)	本年	7.5	6.5	6.2
	平年	6.5	6.1	5.4
	前年	6.9	6.5	5.5
	平年比	115	107	115
板柳町五幾形 (西北地域県民局)	本年	7.1	—	6.8
	平年	6.4	—	5.4
	前年	6.5	—	5.8
	平年比	111	—	126
三戸町梅内 (三八地域県民局)	本年	7.5	7.1	6.3
	平年	6.3	5.9	5.3
	前年	7.2	6.6	5.7
	平年比	119	120	119

注) 各県民局のデータは農業普及振興室の生育観測ほ調査データ

(2) 着果状況

7月19、20日に県が行った着果状況調査の結果では、園地によってバラツキがあるものの、いずれの品種も標準着果率を上回っている。

○着果状況

(単位：%)

品種	着果率			標準着果率 (県基準の適正着果程度)
	本年	平年	前年	
ふじ	32.9	31.4	35.3	25.0
ジョナゴールド	33.5	32.9	37.0	28.6
つがる	36.6	36.2	41.3	28.6
王林	36.7	35.4	42.1	25.0
トキ(参考)	34.2	—	39.4	25.0

注) 県内72地点(ジョナ67地点、トキ64地点)で調査、着果率：100頂芽当たりの着果数割合(%)、平年値：平成5年～令和4年までの30か年の平均

(3) 作業等の進み (7月24日現在)

ふじの仕上げ摘果は終盤を迎えており、仕上げ摘果が終了した園地では見直し摘果が行われている。

徒長枝整理や支柱入れが行われている。

(4) 病害虫の動き

(7月24日現在 りんご研究所)

斑点落葉病	感染継続中 殺菌剤無散布の県予察ほでの新梢葉発病葉率 (スターキング) (本年: 7月20日24.1%、平年: 7月20日6.4%)
褐斑病	感染継続中
腐らん病	粗皮感染継続中
黒星病	分生子による2次感染継続中 殺菌剤無散布の県予察圃での新梢葉発病葉率 (ふじ) (本年: 7月5日74.8%、平年: 7月5日42.7%)
モモシンクイガ 及びナシヒメシンクイ	成虫の羽化及び産卵継続中
リンゴハダニ 及びナミハダニ	卵～成虫が混在。幼虫～成虫が葉を加害中
リンゴコカクモンハマキ	幼虫主体
キンモンホソガ	第2世代幼虫～蛹主体 第2世代成虫50%羽化日 (本年: 7月20日、平年: 7月26日)
クワコナカイガラムシ	まもなく第1世代ふ化幼虫の移動始まる

2 作業の重点

(1) 摘果

園地によっては着果量の多い樹が見られる。着果量が多いと、翌年産の花芽形成などに悪影響を及ぼすので、仕上げ摘果を終えていない園地では作業を急ぐ。仕上げ摘果を終えた園地でも、今一度着果量を点検し、見直し摘果により肥大の劣る果実やさび果、変形果などを主体に摘み取る。

(2) 徒長枝整理、支柱入れ、枝吊り

樹冠内部に十分日光を入れ、薬液の到達をよくするために、不要な徒長枝を切り取る。果実が大きくなるにつれて枝が下がり、重なり合ってくるので支柱入れや枝吊りを行う。

日焼け果の発生防止のため、高温が続くと予想される場合は、徒長枝の整理や支柱入れ等の作業は控える。

(3) 恋空の収穫

熟度は例年より7日程度進んでいる。

着色を待ちすぎて収穫が遅れると、果肉の軟化につながるため、果肉の硬さを確認し、適期に収穫する。

山選果に当たっては、変形果や日焼け果、病虫害被害果などを取り除き、出荷先の基準により選別・出荷する。

収穫した果実は、高温下に置くと果肉の軟化など品質の劣化が早くなるので、すみやかに冷蔵施設に搬入する。

(4) 「7月末」の薬剤散布

「7月末」の薬剤散布は、黒石、弘前、三戸で7月31日～8月1日頃に実施する。

薬剤散布に当たっては収穫前日数や年間使用回数などに注意する。散布むらが生じないように基準散布量を守り、降雨前の散布を徹底する。

無袋栽培では毎回、シンクイムシ類防除剤を使用する。

アブラムシ類の発生が多い園地では、発生に応じて、防除剤を使用する。

「7月末」

地域	散布時期	基準薬剤	散布量/10 a
黒石	7月31日	オキシラン水和剤 又は有機銅剤	500倍
弘前	～8月1日頃	キノンドー顆粒水和剤	1,000倍
三戸		オキシンドー水和剤80	1,200倍
		又はアリエッティC水和剤	800倍
		又はダイパワー水和剤	1,000倍
		又はベフラン液剤25	1,500倍

炭疽病の発生が例年多い園地や高温多湿条件が続いて多発が懸念される場合は、オキシラン水和剤、有機銅剤のいずれかを選択する。

輪紋病のいぼ皮病斑が多発している園地では、枝における新たな感染を抑制するため、オキシラン水和剤、有機銅剤、ダイパワー水和剤、ベフラン液剤25のいずれかを選択する。

褐斑病の発生が前年に多かった園地や多湿条件が続いて多発が懸念される場合は、有機銅剤、ダイパワー水和剤のいずれかを選択する。

アリエッティC水和剤及びベフラン液剤25は、殺虫剤又は殺ダニ剤と組み合わせる場合、最後に調合する。

(5) 褐斑病対策

例年より早く一部園地で発生が見られている。

前年に発生が多かった園地では、感染拡大を防ぐために基準薬剤を丁寧に散布するとともに、「7月半ば」又は「7月末」のいずれかにトップジンM水和剤1,500倍又はベンレート水和剤3,000倍も使用する。

(6) 腐らん病対策

腐らん病は感染してから1～2年後に発病するため、適切な対策を速やかに講じることが重要である。

枝腐らんは、見つけ次第切り取り、適切に処分する。

胴腐らんは、処置が不十分であったり、誤った処置が行われている園地もみられるので、再発病斑を含め、削り取り法か泥巻き法のいずれかの処置を適切に行う。胴腐らんの発病が著しい樹は、伝染源になるので積極的に伐採し、速やかに園外へ搬出する。

粗皮感染による胴腐らんの発生が多い園地では、「7月半ば」又は「7月末」のいずれかにトップジンM水和剤1,500倍又はベンレート水和剤3,000倍も使用する。

(7) 黒星病対策

気温が高くなると黒星病の発生は一時的に停滞するが、今後の感染源を減らすため、被害葉、被害果は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

(8) 斑点落葉病対策

急増が懸念される場合は、ポリオキシシンAL水和剤1,000倍も使用する。

ポリオキシシンAL水和剤は薬剤耐性発達の懸念があるので、連続散布を避ける。

(9) 炭疽病対策

伝染源となるニセアカシアやくるみ類などは、りんご園の周りから取り除く。

(10) ハダニ類対策

発生状況に応じて適正な防除を行う。散布の目安は1葉当たり2個体以上あるいは寄生葉率50%以上である。殺ダニ剤は薬剤抵抗性が出やすいので、年2回以内使用のものでも年1回の使用とする。

ダニサラバフロアブル、スターマイトフロアブル、ダニコングフロアブルは合わせて年1回の使用とする。

ダニオーテフロアブルは銅剤（有機銅剤及びオキシラン水和剤）と混用しない。銅剤を散布した後は使用しない。また、散布後に銅剤を使用する場合は10日以上散布間隔をあける。

リンゴハダニとナミハダニに対する殺ダニ剤の適用表

薬剤名	倍数	使用時期	年間 使用回数	リンゴ ハダニ	ナミ ハダニ
サンマイト水和剤	1,500倍	収穫21日前	1回	○	×
バロックフロアブル	2,000倍	14日	2回以内	○	×
エコマイト顆粒水和剤	2,000倍	7日	1回	○	○
オマイト水和剤	750倍	3日	1回	○	○
コロマイト乳剤	1,000倍	前日	1回	○	○
マイトコーネフロアブル	1,000倍	前日	1回	×	○
ダニサラバフロアブル	1,000倍	前日	2回以内	○	×
スターマイトフロアブル	2,000倍	前日	1回	○	×
ダニコングフロアブル	2,000倍	前日	1回	○	×
ダニオーテフロアブル	2,000倍	前日	1回	○	○

○：効果が高い、×：効果が低い

(11) シンクイムシ類対策

被害果は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

もも、なし、日本すもも、プルーン、マルメロなども発生源になるので、適切な管理を行う。

(12) クワコナカイガラムシ対策

バンド巻きによる誘殺を実施している場合は、ただちにバンドを除去し、適切に処分する。

発生が多い園地では、7月下旬（末頃）と8月上旬（前回散布の10日後頃）にアプロードフロアブル以外の防除剤による胴木洗いを行う。

(13) マメコバチの巣箱の回収

マメコバチの巣箱は、速やかに回収し、適切に保管する。

(14) 乾燥対策

苗木や若木は乾燥の影響を受けやすいので、園地の状況を把握し、干天日（降水量5mm未満）が2週間程度続いたら、1㎡当たり20ℓ程度をかん水する。

また、草からの蒸散を防ぐため、草刈りをこまめに行い、樹冠下に敷き草する。

(15) ビターピット防止対策

樹勢が強く、果実肥大が旺盛な園地では、ビターピットが発生しやすいのでカルシウム剤の果面散布を丁寧に行う。

樹勢の弱い樹や高温時、あるいは干ばつ時には薬害発生（葉縁褐変）の恐れがあるので避ける。

カルシウム剤の散布方法

資材名	散布時期 (散布間隔)	資材形状	水1000当たり 使用量 (倍数)	散布回数 (回)
スイカル	6月上旬～9月中旬 (10日以上)	粉状	330 g (300倍)	3～5
セルバイン	6月上旬～9月上旬 (10日以上)	粉状	250 g (400倍)	3～5
アグリメイト	6月上旬～9月中旬 (15日以上)	液状	200ml (500倍)	5

3 一般作業

- (1) 草刈り (2) 高接ぎ樹の管理 (高接枝には添え木して風害防止)
(3) 極早生品種の着色手入れ、収穫 (4) 鳥害防止対策

4 今後の作業 (8月8日～8月25日)

- (1) 見直し摘果 (2) 徒長枝整理、支柱入れ、枝吊り (3) 草刈り
(4) 薬剤散布 (5) 落果防止対策 (6) 腐らん病対策
(7) クワコナカイガラムシ対策 (8) ビターピット防止対策
(9) 苦土欠乏対策 (10) 風害防止対策

青森県農薬危害防止運動展開中 (6月～8月) !

《 農薬使用基準の遵守 》

農薬を使用する場合は、必ず最新の農薬登録内容を確認する。

○農林水産省「農薬登録情報提供システム」 (<https://pesticide.maff.go.jp/>)

農薬の使用にあたっては、事前に周辺住民に対し、農薬の散布日時や使用者の連絡先等を十分な時間的余裕を持って知らせる。また、農薬の飛散により、周辺作物や近隣の住宅等に被害を及ぼすことのないように農薬飛散低減対策に留意して散布する。

《 農業保険に加入し、農業経営に万全の備えを!! 》

農業保険には、果樹共済、農業経営収入保険などがあります。自分の経営にあった保険を選択、加入して、自然災害をはじめとしたリスクに備えましょう。

詳しくは、お近くの農業共済組合まで、お問い合わせください。

農作業安全を心がけましょう！

熱中症予防には、こまめな休憩と水分の補給をしっかりと行いましょう！

次回の発行は令和5年8月7日(月)の予定です。